

本発表はこうした成果を踏まえ『詩経』豳風・東山篇に見える「宵行」に就いて解釈を試みる。「宵行」は、伝統的解釈では「興」詞でその訳は「宵行く」とされている。しかし、これでは一体どのような意味の「興」詞か理解し難い。この「興」詞についての解釈は古来二転三転し、未だ確定していない。その原因としては、毛伝が同句にある「熠燿」の語を螢火とし、また、孔疏が、鬼火と解し、指し示す方向が不透明になったからである。「宵行」の語はこの篇のみに見え、岡元鳳が、「和名ホタル」、江村如圭が、「ツチホタル」とする従い、ホタルと解釈すれば、「興」詞として見る事が可能である。また、そのホタルとは、一体どのような呪的意味をもつのかを検討する。

摯虞「思游賦」における神仙の描写をめぐって

本学大学院非常勤助手 小嶋 明紀子

西晋期の文人である摯虞は、その実作よりも、むしろその著書『文章流別論』の名によって知られている。その摯虞には、神仙界遊行の場面を持つ長編の「思游賦」がある。

「思游賦」は、『楚辞』の「遠遊」の伝統を継承し、現実社会における苦悩を描く場面と、神仙界に遊行する場面の両方を持つ。この二つの要素は、一方は非常に現実的であり、一方は非常に非現実的である。そのため、この二つの要素を一つの作品の中で融合させることは、本来難しいことのはずである。「思游賦」の先行作品の中には、この二つの要素の齟齬が目立つものも見られるけれども、「思游

賦」はこの二つの要素を合理的に接合させることを試みている点に特徴がある。

本発表では、「思游賦」を「神仙」を描いた辞賦作品であるという観点から捉え、本作品における「神仙」の描かれ方を分析し、「神仙」を描いた辞賦作品の流れにおける文学的位置を考察したい。とくに、神仙界のトポスを「東」「南」「西」「北」の方角ごとに、合理的に構築しようとしていることに注目し、先行作品における神仙界のトポスの描かれ方との相違を明らかにしたい。